1
はたしていったい何ものか、魂に父なる神を忘れさせてしまったのであろうか

4 むろんそれは、あえて言葉への一歩を踏み出して、最初の基別を建て、自分を自分だけのものにしたと欲したから、それが彼にとってそのような不幸のはじめとなったのである

訳注においては、「ここは魂のなかに、知性と鎮すべき方がおいてあろう」としている。それは、本論の表題がプロティノス自身が付したものではない（ポルピリオスによる「伝」4）を根拠としている

自分はかしこから分派されたものであって、全体からのものに依存しているわけなのに、そういう自己自身をも、ましてや神をも蹴ることのないようなことしてしまったのはいったい何であろうか

6 特にこの自分勝手による心とそのうぬぼれ

10 それはちょうど小児が、生後間もなくその手許から引き離されて、長い間遠方で育てられたために、父がだれであるか、自分が何者であるかを識らないようなものである

13 つまり、かしこにおいて設とされているものは、ただ自分のみしか、自己を尊ぶ、自己を愛する者、自己の劣悪さを証入することだからである

16 したがって、かのものをまるで識らず無いと言うことについては、魂は、自分を尊しんで、この世の事物を尊ぶふうにとどまらず、その一段下るということになって来る

19 しかしながら、自分を、まじまじと、眺げまる諸々の事物よりも劣ったものだとかて、自分を向より熱情値値な可見物であると考え、他ののそもしら価値をもっているのであるこの事物よりとしてのものは、思いを神の本性や能力に致すことは決して できないであろう

19 しかしながら、自分を、まじまじと、眺げまる諸々の事物よりも劣ったものだとかて、自分を向より熱情値値な可見物であると考え、他ののそもしら価値をもっているのであるこの事物よりとしてのものは、思いを神の本性や能力に致すことは決して できないであろう

25 すなわち、そのニつとは、それぞれ何であろうか

25 一つは現在魂によって価値ありと指されている事物の無価値を明らかにするものであって、これ、この、魂の機会において詳説するであろう

30 なぜなら、これは、所求の目的に近く、かつ前者の言論にも役立ちうるからである

32 それは自分がそのような事柄を探求する能力をもっているからであり、これを捉えるよう眼をもっているからであり、まこれを探求するに適当であるのとからあるからかに助っておくためのである

しかし性に合つなら、探求は適当であり、発見も可能だからである

2
それでは、まず第一にすべての魂が留意すべきはこのことなのである

4 まさ大陽を太陽ならめているのを自分ならば、この大きな天を天たらしめているのも自分ならば、この大きな天を天たらしめているのも自分ならば、この大きな天を天たらしめているのも自分ならば、自分が天の理の秩序をつくり、自分がこれに気思王しゃ運行を与えているのである

7 なぜなら、それが生じて来るのも、じぶで行くのも、魂がそれらに生を補給してくれるから、それとそれらを識き去りにして行ってしまうことにおいてのみ、魂は自分が自分自身を離れ去ることはないので、常住存在しているからである

11 すなわち天界に宿る魂を眺めてみることである

15 しかしそのばあい、静寂に憧さなければならないのは、魂を外から取り囲んでいる肉体と、その肉体の波瀾だけであって、それは、まさにまた周囲の全体が静止していなければならない

19 そして八方から、そ の静止は そこの中へ魂が、外からは沈黙はなれこみ、注ぎこみ、八方からそのの中へ入ってくるとき、その中を眺らずにと奇有様を考えてみることである

24 そして天は魂の思慮あるは構きによって、水遠の運動をさせられているのである

26 否、もしろ素材だけの暗黒であり、非存在なのであって、ひとの言う「神々の悪み給うところ」のものである

30 すなわち天はどれほど広大であるにしても、その大きさの全体に対して、魂は自己自身を与えたのであって、その、ためにに大小いずれの間隔を取ってみても、みなすべて魂の生気を帯びていたいていたのである

35 すなわち魂は自己を部分にはし、取り、そして、その自分の各個部分にはってものを生かすのではなく、万物が生きているのは、一全体としての魂によってなのである

その個在性と一体性において、魂は生みの父（知性）に似ているのである

40 そしてこの世界はこの魂の中とに神となっているのである

また大陽も、魂をもつが中とに、神として存在しているのであり、その他の星辰もまたしかりである

まことに「不滅物を投げ捨てなければならないとは、星体はなおさらなのである

44 そしてわれわれの魂もまたに同種類なのである

45 それが本来の魂なのであって、おんとそれ体的、物体的なものの下べてにまさる価値をもつものなのである

46 すなわち物はすべてなのである

49 しかしこれらのものが希求されるのは、それに魂の生気があるからだとすれば、なぜ人は自分自身を等閑に付して、多の者を追い求めるのか

3
実にかのことと魂は尊くかつ神のごときものであるから、今は神の後を追うのに、かのごときものに倣い、かのごとき根源を供として、かの神のところへと昇って行かなければならない

5 それでは、魂も神のごときものであるが、これよりいっそう神のごときものが、魂の上方に開いて存在するから、これをどうるるようにし給え

6 すなわち魂は、上述の説明によって明らかにされたように、すべてものの、かしこの上方に開いて存在するから、これ影像のごときものにとどまるのである

10 たとえば火の熱には、火と一緒にあるのと、火がほかへ給与するものとの別があるようなものである

12 かべて魂は、知性から出ているが故に、知性的なのである

13 すなわち知性は父親のごときものであって、自分の生んだ息子が、自分自身にくらべて、まだ不完全であるから、これを養育するようなものである

16 すなわち視線を内面の知性に向ける時、その内面から眺は、直知の対象となるものを、しかも自裏面有のものとして得来たって、活動を営むのである

19 これ以下の者ったのは、その内面から眺は、直知の対象となるものを、しかも自裏面有のものとして得来たって、活動を営むのである

21 側についてはどいうのは、両者の間には、両者が別ものであるということは外には、何も分離できるものが存在しないからなのである

24 しかし知性の素材となるのは、素材でも知性的であるから、測しかつ単調で、そこにおいてはまさに知性のごとくであるけれ ばならない

そして推理計算のうちにおいても知性が発揮されるのであって、その思考のもとも一度知性から弱がればならないのである

15 かべて、魂の存在基礎も知性から来ているし、その背面の、思考の活動は魂が知性を見ることによって営まれるのである

そして魂の活動と呼ばるべきは、ただかのごときものの、みに限られたばならないのであって、それはいずれも知性的で、しかも自家のうちから来るものに限られねばならない

20 かべて知性は、それが自己の魂の父親であって、現在その側についていて、これに助力するからなのである

23 否、もしろ両者は前後に接続するがごとき関係にあって、一方は形相のごとく、他はこれを受容する素材のごとき関係にあるのである

25 そしてまさにこのごとによって、すでに魂がかべのごときものであるとはいえ、知性はこれ以外にこれにそれたものであることが明らかになる

4
しかしこの点はまた次のことから明らかにされるであろう

——眼に見える神々も、またあらゆるものは見えないものとは知らず神々も——

すなわちこの感覚されは世界は、その大きさにおいて、その美しさにおいて、まさにの永遠に、変らぬ運動の秩序において、これを眺めやる者をして感嘆せしめるものがあるにしても、まったこれには神々が、

現ひたまい、大モーンや動植物もこれに寝っていて、すべての様魂の種ならばはないにしても、人はなおこれが原型となっている、もっと真実性の多い世界へと昇って行って、そこにはこれらすべての直知の対象となって存在しているのを視なければならない

9 そしてこれらの永遠には並び以外のは知性が立っており、はかべへらの知恵が立っているのを地なければならない

10 そこに視られるのこそ真実のクロノス（Κρόνος）

——すなわち豊満（Κόρος）と知性の神なクロノス——

治下の生活なのである

13 なぜなら、すでに満足すべき状態にある者が、何で変化を求めようと

14 もしろすべてにこのうえなく完全な情態にあるから、このうえの増加さえも必要とはしないのである

15 それは知性がすべてのに対して最も完全であって、そうでないような点は一つもない事ではないためである

17 しかもその直知作用は、探求者のそれではなく、すでに所有しているものの直知作用のそれならのである

19 時間はこれの模像にすぎず、魂の周辺を巡せ めぐって、そこにある、そして、来るものを迎えている

20 すなわちその魂の周辺には、他のものに代わって、ときたにおいてのが来るからである

かべて知性ある時にはソクラテスが、また他の時には無がこれ、ある時には無がこれ、ある時には無がこれ、ある